

小嶋渚<sup>1)</sup>、金子佳世<sup>1)</sup>

1) 新潟医療福祉大学 看護学科

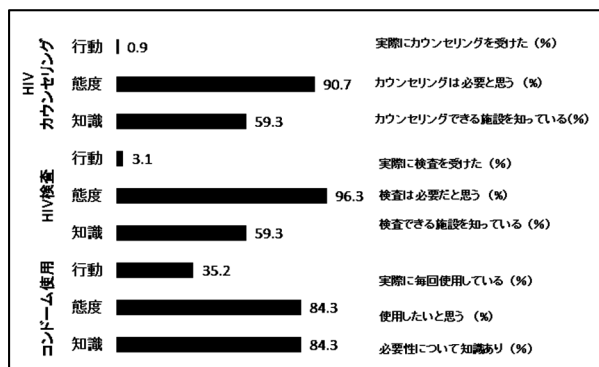
【背景・目的】HIV感染者数は年々増加し、2015年末までに累計約17,909人に達し、都市部と地方間でその傾向に差はない。新規エイズ患者の感染経路は性的接触88.2%であり感染経路の大半を性的接触が占める。研究者は、大学入学後、HIV/AIDSに関する教育を受ける機会が大幅に減ったと実感している。様々な人との交流が増える大学在学期間、HIV/AIDSに関する教育を充実させることは、若者のHIV/AIDS感染予防につながると考えた。そこで本研究では、大学生のHIV/エイズ予防に関する知識・態度・行動の実態を調査し、今後どのような予防対策が必要か検討する。

【方法】量的研究デザイン。自記式質問紙による実態調査。研究協力者は、男女20歳以上の大学生で、研究協力に対し書面で同意を得られた者とした。なお、本研究は新潟医療福祉大学、倫理審査委員会による承認を得て実施した。(承認番号：17702-1607001)

【結果】合計163名に対し質問紙を配布、108名から回答を得た(回答率59.5%)。回答者は、男性9名、女性98名で、性交経験数なしの者27名(26.8%)、1名のみ34名(30.9%)、2名9名(8.2%)、3名以上32名(28.9%)であった。

最後に啓発教育を受けて以降の経過月数は、「24~36か月以下」が56人(51.9%)と最も多く、次いで「12~24か月以下」が12人(11.1%)、「3か月未満」が5人(5.2%)であった。

コンドーム使用、HIV検査、HIVカウンセリングに関する知識・態度・行動に関する実態は、下記図の通りであった。



【考察】HIV/AIDSに関する教育では87.0%の学生が何らかの形で教育を受けていた。しかし、最後に教育を受けてから24~36か月を経過した者が半数を占め、大学生生活で

多い現状、大学生に対し、昨今行われている危険ドラッグ使用を防ぐ教育と絡め、定期的にHIV/AIDS予防を含めた性教育を行う必要があると考える。

「(コンドームは)絶対に必要」と述べている学生は84.3%であるのに対し、実際に性交渉時に毎回コンドームを使用している割合は35.2%と半数以下であった。知識に伴った行動を取ることが出来ず、HIV/AIDSをはじめとする性感染症にかかるリスクを冒している学生は少なくない。本研究では、詳細理由は追究していないが、先行研究同様、自由記載回答では、男子が主体となってコンドーム使用を決定していることが示唆された。適切な予防策をとるためには、パートナー同士で教育を受ける機会を設けることで、将来家族を作り、社会の中心となって活動していくという責任感や予防に対しての重要性について考える機会を作る必要がある。

研究協力者の60%以上が性交を経験していたが、HIV/AIDS検査を実施したことがある者は、わずか3.1%であった。自由記載回答で、「自分も相手もAIDSだと思っていない」と回答があり、HIV/AIDS感染リスクに対する意識の低さが伺われた。更に、HIV/AIDS検査を受ける場所が全くわからないと答える学生も0.9%と存在する。検査を受けることが、HIV/AIDS感染リスク軽減につながるほか、感染した場合の早期対応となることなどと共に、性交経験者が、検査を受けられるよう、検査を受けられる場所について、啓発する必要がある。

【結論】大学生生活でHIV/AIDS予防教育を受ける機会は、減少している。危険ドラッグ使用を防ぐ教育と絡め、定期的にHIV/AIDS予防を含めた性教育を行う必要がある。コンドームの必要性に関する知識はあるが、使用徹底されていない。パートナー同士で教育を受ける機会を設け、将来家族を作り、社会の中心となって活動していくという責任感や予防に対しての重要性を考えるよう促したい。また、HIV検査場所に関する正しい知識と、HIV検査を受ける機会を増やす働きかけが必要である。

#### 【参考文献】

- 1) 独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊：エイズ対策入門, 55-56, 2016.
- 2) 羽入雪子, 佐藤怜：大学生の避妊及び低用量ピルに関する意識, 日本赤十字秋田短大紀要, (7): 53-59, 2002.
- 3) 木原正博, 木原雅子：若者の性行動と性感染症予防対策, 日医雑誌, 126 (9): 1157-1160, 2001.
- 4) 種本香, 原田小夜, 大籠広恵ら：看護大学生における性感染症の知識と認識の実態, 聖泉看護学研究, 2: 89-96, 2013.
- 5) 木原雅子：感染予防対策若者のHIV感染予防対策複合予防モデルとしてのWYSHプロジェクト, 日本臨床, 68 (3): 541-545, 2010.